

# 刊行にあたって

独立行政法人 情報処理推進機構

理事長 藤原 武平太

一九六四年 四月 通商産業省入省  
一九九一年 六月 通商産業省通商政策局長  
一九九二年一〇月 ブルガリア共和国駐劄特命全權大使  
一九九五年 六月 シャープ株式会社常務取締役  
一九九八年 六月 シャープ株式会社専務取締役  
二〇〇三年 七月 I P A 理事長に就任

二〇〇四年一月五日、特別認可法人 情報処理振興事業協会は、独立行政法人 情報処理推進機構へと生まれ変わりました。略称の I P A (Information-technology Promotion Agency, Japan) はそのまま継承します。

ご承知の通り、I P A は一九七〇年の発足以来、情報処理の振興を目的に、プログラムの開発及び利用の促進、情報処理サービス等に対する助成、情報セキュリティ対策、人材育成等の事業を実施してきました。そして、この度の独立行政法人への移行により、今後はより一層、的確かつ効率的な事業の運営が期待されていることを、職員一同と共に強く認識しております。

## これまでの事業を振り返って

新たな出発を契機に、私たちは、未来を見据える一助として、過去の事業を振り返ってみました。

I P A の築いてきた実績の本質、いわば DNA を知るためでした。すると、さまざまな事業の中から、生活の近くに I P A が貢献しているソフトウェアがあり、そこには、大きな技術の流れがあることを発見しました。さらに、それらの技術を開発し、普及させ、あるいは支えている多くの人たちの汗と喜びがあることを見出しました。もちろん主役は私たちではなく、私たちがささやかなお手伝いをした日本の研究者や技術者たちです。

輝かしい実績につながった事業に共通するのは、彼／彼女らの独創的な着想、みごとなブロジェクト運営力、敬服すべき使命感、洞察力そして志操の高さでした。さらに仔細にお話をうかがうと、より深い共通点がありました。それは先人たちの業績に対する敬意と、人が支え合うつながりです。

技術は、はるかな地に源流を持つ細流が各所から集まり、時には巖を砕き、時には地に伏して流れる水脈にたとえることができ、必ず先人たちの努力につながっています。

また、人は、大地からそびえる山々に似て、その高さと連なりは、互いのエネルギーが積み重ねられた結果なのです。



この「技の水脈」と「人の山脈」の、脈々たる、あるいは重畳たる連なりは、時代を超え、広く世界にまで及んでいます。この連なりに加わることの敬意と自負は、すぐれた研究者や技術者に共通するものであり、彼／彼女らを通して、私たちIPAも分かちあえたと考えています。

本書は、これらのプロジェクトの背景や、推進した方々の苦勞と喜び、IPAとの関わりなどをドキュメンタリー風にまとめたものです。過去の事例は数多くありますが、この本では、開発成果から生じた効果や反響を考え、その一部をさらに十に絞って次の三つの分類で紹介しています。

- (1) 身近な生活をより豊かにする
- (2) ネットワーク社会の発展を支える
- (3) 果敢なチャレンジで未来を引き寄せる

ここに納めきれなかった事例は、IPAのホームページで公開しています。ぜひ、そちらもご覧ください。

### IPAの新たな改革と挑戦

本書は、IPAの、新たな改革と挑戦へ向けた決意の表明であります。なぜなら、過去の実績に価値があるのは、現在及び未来に立ち向かう有形・無形の資産に変えられるからです。過去の単なる延長が現在と未来ではありません。

今、新生IPAは、事業と組織の両面で改革を進めています。

事業面では、日本の産業活性化と競争力向上につながる活動を、積極的に推進します。とくにソフトウェアという知的なパワーについて、現状を正しく把握し、限られた資本、時間、人材を戦略的に結びつけます。たとえば「日本のソフトウェア輸出額は九〇億円なのに、九〇〇億円も輸入している。ソフトウェア後進国だ。」という議論があります。でも本当にそうでしょうか？ 自動車や家電製品に組み込まれたソフトウェアは統計には出ませんが、世界中で、身近なところで役立っています。こんなところにも目を向けて、得意な分野を選択し、資源を集中するという発想で取り組み、人々の才能と活力を引き出すのが、私たちの使命です。

組織面では、これまで法律で設立された特別の法人の組織人として、予算の執行を念頭において進めてきた仕事のやり方や気質、風土の改革を進めます。

産学官の力をうまく結集して、将来につながる戦略的事業を推進するからには、組織、制

度そしてスタッフの意識も変えねばなりません。常にお客様であるソフトウェア分野の研究者や技術者、そのまたお客様である国民を念頭に置き、サービス意識を持ち、コスト意識を高め、仕事のスピードをあげる。そして内外への情報公開もさらに推進します。

これらを具体化するための中期計画は本書後半に説明しましたので、そちらを是非ご一読下さい。

ここで、ひとことだけ申し上げます。

改革のキャッチフレーズは、『創造』、『安心』、『競争力』です。

これは、私たちの反省と決意から生まれたものであると共に、各界識者による評価委員会（委員長・長尾真 前京都大学総長）に昨年三月に出して頂いた「評価報告書」の内容も踏まえたものです。

今、不転の決意で改革に取り組もうという私たちの昂ぶりや苦しさは、もしかするとこの本に登場された方々が、かつて経験したことではないでしょうか？

一つのプロジェクトを、恵まれぬ条件と環境の中で出発する時の覚悟、それが胸突き八丁にさしかかった時の苦しさ、そして完遂した時の喜びを、私たちも味わうのです。

この本の作成にあたり、多くの方々から「IPAの手助けがあった」というお言葉をいただき、とても感激しました。今後、私たちは、既知の、あるいは未知の研究者・技術者の皆様の自己実現を支える役割をより大きく果たして参りたいと思えます。

それは、私たちの使命であり、又、大きな喜びなのです。

最後になりましたが、本書の取材にご協力いただいた多くの方々、全国の企業、大学、公的機関、研究所の関係者に心から感謝申し上げます。

二〇〇四年一月吉日